



181号

2013/3/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp

◆'わんりい' HPのアドレスが上記になりました。



母と子 2008年秋/撮影場所:雲南省アチェン・チベット族自治州シャングリラ県建塘鎮

撮影者:達瓦竹瑪(協会支援第2校「吉能小学校」児童)

'わんりい' 180号の主な目次

北京雑感(72)北京のドライバー.....	2
私の調べた諺・慣用句(17)「杯中の蛇影」.....	3
媛媛讲故事(51)「花好き翁」.....	4
中国・城市めぐり(22)「青島市・そのⅡ」.....	5
私の四川省ひとり旅(62)/旅の終わり(最終稿).....	8
「四姑娘山・写真だより」(29).....	11
スリランカ・ケラニアだより.....	12
スリランカ紹介(65)「スリランカの棚田」.....	14
モンゴル滞在日記Ⅴ.....	15
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より.....	18
【智子の雑記帳】90「セクハラ・パワハラ.....」.....	18
留学生スピーチⅡ	
施恩、戴沢宇、タキシルバシェワ・ケレザ.....	19
【活動報告】2013 'わんりい' 新年会.....	22
'わんりい' 掲示板.....	23・24

【写真説明】

日本雲南聯誼協会は雲南省山岳地域の少数民族を対象に、小学校建設を柱とした教育支援活動を行っています。2007年には支援小学校の子どもたちに使いきりカメラを渡し、「目に映るありのままの日常」を切り取ってもらおうという「小さなカメラマン」プロジェクトを立ち上げました。初めてカメラを持った少数民族の子どもたちが自由な感性で撮った、世界にふたつとない作品です。

昨年11月初旬、町田市薬師公園・フォトサロンで展示した写真の中から3枚を選んで'わんりい'会報・新年号、3月号、4月号の表紙で紹介しています。

認定NPO法人日本雲南聯誼協会

東京都新宿区市谷左内町21-13-1階

☎03-5206-5260 FAX03-5206-5261

HP:<http://www.jyfa.org>

Facebook: <http://www.facebook.com/NPO.JYFA>

先日、昨年 9 月に来日した留学生達と話す機会がありました。彼らに、月並みな質問ですが「日本に来て見て、何か戸惑ったことがある？」と聞きましたら、その答えは「特に何も思いつかない」と言うものでした。さすが若い人たちは適応能力が高いからと、感心しながら、質問した我々は、中国で歩行者優先が守られていないので道路の横断に戸惑いを感じたとの話で盛り上がりました。

我々にとって一番怖いのは、右折してくる自動車です。ご存知の通り、中国の自動車は右側通行ですから、右折車とは、日本の左折車と同じことです。日本では左折車も前方の信号に従い、赤の時は止まり、緑になってから左折をしますが、中国の右折車は、前方の信号が赤でも自由に右折出来るのです。それでどうなるかと言うと、交差点で歩行者の信号が緑なので横断を始めると、直進と左折の車は止まっていますが、右折車は横断歩道に突っ込んで来て右折して行きます。

交差点が大きいと、右折レーンが 2 車線あったりして、横断歩道をかなり進んだ所で右折車が突進して来ると、本当に怖い思いをします。日本と違って道幅が広いので、運転のテクニックとしては、余りスピードを落とさずに曲がる事が出来る上に、歩行者優先の意識が薄いので、歩行者側から見ると、本当に突っ込んで来るとい印象です。同じ条件でも左折だと、曲がった後に歩行者と交差するので、歩行者が感じるスピードはかなり遅いと思うのですが、右側通行では、横断歩道の信号が緑の時入ってくるのは曲がる前の右折車ですから、其のスピードはかなりのもので、足がすぐみえます。

もう一ヶ所注意をしなくてはならない所が、ガソリンスタンドの出入り口です。ある時、歩道を歩いていて、一台の車がガソリンスタンドから出て来る処に出くわしました。車を運転している人と目が合い、先方が歩行者である私を認識しているのを確認して、車の前を急いで通り過ぎようと歩を早めた時、車も歩道を横断しようと乗り入れて来て、思わず私の足が急ブレーキをかけました。私の前後に歩行者はいないし、車が出て行こうとしている道路は交通量が多いので、日本だったら歩行者を先に行かせて後からゆっくり出て行くところですから、歩行者を認識しながら先に出ようとする自

動車には、虚を衝かれました。

案の定、車はすぐに車道に出られないで歩道上に止まりました。私は、其の車の後ろに回りこんで其処を通り抜けました。歩行者が 5.6 歩進む間待って、道を譲っても其の自動車の大勢に変わりはないと思うのですが、どうも中国のドライバーは、譲ると言うのが余り得意ではないようです。

私は一度北京で、日本では考えられないような光景を眼にしました。それぞれ片側 4 車線と 2 車線の道路が交差した交差点の近くのバス停でバスを待っている時でした。2 車線道路の先のほうで何かあったようで車がかえ始め、信号が緑になった時には交差点の先の道路には 3 台分ほどしかスペースがありませんでした。ところが信号が緑になると車はどんどん交差点に入り、とうとう車で一杯になってしまいました。

車が殆ど動かないうちに、4 車線道路の信号が緑になりました。でも、交差点内の車が動けないので、直進が出来ません。クラクションを鳴らしますが、どうにもなりません。こんな身動き出来ない状態が 30 分ほども続いて、最後には公安の巡査が出て、交通整理をしてやっと通れるようになりました。これなど、交差点が渡り切れないと判断したら、入るのを控えて、相手方に道を譲れば絶対に起きない渋滞です。

この「譲らない症候群」は、路線バスと乗用車の間でも起こります。バス停が近くなって、バスが歩道寄りの車線に変更しようとしても、平行して走っている車が譲ってくれないのです。バスに車線を譲ると、バスの後ろの車がどんどん先に行って、譲った車はバスの後ろで待たなければならなくなるからです。譲りたくても譲れない状態です。結果として、バス停でバスが 2 台並列して乗客を乗り降りさせているのを何度も見かけました。

渋滞に巻き込まれたバスに乗っていて、外の車の様子を観察すると、一台の車が譲った為に多くの車が殺到して混乱が起こり、そこから渋滞が始まる様子を見ることがあります。はじめ、私はドライバーがちょっと譲り合えば、混乱は解消すると思ったのですが、そんな生易しい問題ではないようです。道の譲り合いは、一人二人が実行しても、却って混乱を酷くするだけで、何の解決にもならないことが分かりました。

杯中の蛇影

私の調べた諺・慣用句 17

三澤 統

皆さんは次のような経験をしたことがありませんか？

夜中にふと目が覚めたら、窓の外で何やらコトツ、コトツと音がする。これはもしかしたら賊が家に忍びこもうとして何かやっているのではないかと思い、怖くなり眠れなくなってしまった。翌朝調べてみたら窓のシャッターの紐の先が窓ガラスに当たっていたのだった。

これは思いこみによる恐怖で眠れなくなってしまった訳ですが、

今回紹介する「杯中の蛇影」の主人公は、ある怖い思いこみで、なんと病気になり寝込んでしまったのです。「杯中の蛇影」の意味は、辞書では次のように載っています。

▲ 小学館デジタル大辞典：

“杯中に蛇の影があるのを見て、蛇を飲んだと思っ
て病気になったが、後にそれは弓の影であったと知
り、病気がたちまち治ったという「風俗通」怪神の故
事から”疑い惑う心が生じれば、つまらないことで神
経を悩まし苦しむことのたとえ。

▲ 小学館中日辞典：

「水滴石穿shuǐ dī shí chuān雨垂れ石をうがつ。
根気よくたゆまずに努力すれば必ず事を成し遂げる
ことができるたとえ」

この成語の出自は、東漢の應劭おうしょうの「風俗通義」注の
中の、「**时北壁上有悬赤弩，照于杯，形如蛇。宣畏恶之，
但不败不饮**」(北の壁に掛かっている赤い色の弓が酒
杯に映っていて、蛇のように見える。怖かったが、(杯
の酒を)飲まざるを得なかった)の部分です。

ある年の夏、県令の應郴おうちんは文書管理の責任者の杜宣
を酒席に招待しました。酒席は広間の中に設けられ、
広間の北側の壁に一張の赤い弓が掛かっていました。
光線の加減で、弓の影が杯の中に映っていました。

杜宣はその影を見て、一匹の蛇が杯の中で蠢いてい
るのだと思い驚いて冷や汗が噴き出しましたが、上司の
手前、やむを得ず目をつむりぐっと我慢してそのまま
酒を飲み干しました。召使いが彼のために二杯目を注
ごうとしたのを制して用事にかこつけてその場を辞去
しました。

家に帰る途中、杜宣はさっき自分が飲んだ酒杯の中

の蛇のことがずっと気になっていて、考えれば考える
ほど気持ち悪くなり、胸や腹が痛みだし、その痛みが
耐え難い程になってとうとう寝込んでしまいました。

何日か経って應郴が彼を見舞いに来たので、杜宣は
あの日お酒を飲んだ時に杯の中に蛇が見えたことを應
郴に告げました。應郴は家へ戻ってから、その時のこ
とを何回も思い返してみましたが、いくら考えてもど
うして杜宣の杯の中に蛇が居たのか分かりませんでした
が、ふと北壁に掛かっている例の赤い弓に気づきま
した。彼はすぐにお酒を入れた杯を持ってきて、あの
日杜宣が座っていた場所に座りました。すると果たし
て、杯の中に弓の影が映っていて、まるで杯の中で一
匹の蛇が蠢いている様に見えました。

それで、應郴はすぐに人を遣って杜宣を呼び寄せ、
彼を例の席に座ってもらい、杯の中の影を子細に見て
もらってから言いました。

「あなたの見たのは蛇などではなく、壁の上のあの
弓の姿が杯の中の酒に映っていただけなのだよ」

それを聞いて悪い夢から覚めた杜宣は病もたちど
ころに治りました。

〈注記〉

Fēng sù tōng yì
風俗通義(ふうぞくつうぎ)：中国古代の、事物や名
称の意義を検討し、俗説や邪教を糾正した書。著者
は後漢の應劭おうしょう。(世界大百科事典 第2版の解説より)



イラスト Ye Ling

ある村に花や植物が大好きな老人がいました。名前は秋先と言います。彼の両親は既に亡くなり、嫁も貰っていません。先祖から受け継いだ屋敷の一部を売り、代わりに大きな庭付きの屋敷を買って一生大好きな花と暮らしていこうと心に決めました。

秋先は一年中植物の栽培に夢中で、全ての気持ちを花作りに注ぎました。どこかに珍しい花があるという情報を耳にすると、お金に糸目を付けず彼は必ず買ってきます。意地の悪い人がお金を目当てに、どこかで切り取った草花の根本を泥で包んで秋先に売りつけた事もあります。不思議なことに秋先がそれを庭に植えて肥料をやり、水を注ぐと何日もしない内にその草花は根を張って綺麗な花を咲かせるのです。

秋先は植物を‘命あるもの’として愛して、骨身を惜しまず面倒を見ました。

毎朝夜明け前に起きて水をやり、夜遅くまで落ちた花の始末や、花期の終わった草花を片付けたりしながら、或る花がいよいよ今にも咲きそうになると、ずうっとその花の前に佇んで、まるで赤ちゃんの誕生を待つかのような気持ちで神様に祈りながら開花を待っています。秋、植物が実り、それを収穫するときは必ずその植物の前で先ずお辞儀をし、お礼の言葉を言ってから摘み取ります。

のんびりくつろぐ時、彼は庭の椅子に座って目の前の花や草や樹木を眺めながら、お茶やお酒を飲み、幸せいっぱいな気持ちを味わうのです。

彼が一番嫌いな人は花を勝手に折ったり、植物を虐めたりする人です。彼は常に言いました。

“花は一年に一度しか咲かない。しかも花の命は数日しか持たない。花が微笑んでいる真最中に折ってしまうのは、人間が一番幸せな時に殺されることと同じじゃ。花を折るなどとはとんでもない事だ”

ですから秋先は、秋先が大好きな野ばらばかりでなく、道端に咲いているどんな花も絶対手折ることはしませんでしたし、切り花のプレゼントも全く受け取ろうとしませんでした。

長い年月を掛けて丹精を続けたおかげで草花も樹木も秋先の庭ではすくすくと成長し、牡丹、バラ、百合、鶏頭、カンナ、罌粟、センノウ、タチアオイ、木犀、梅、金柑、桃、梨等々が色とりどりに一年中綺麗な花々が咲き乱れ、果実の美味しそうな薫りが漂っています。庭は木の柵で囲まれているのですが、誰もが柵を通して庭の中の景色を見られますので、秋先の庭の脇を通りかかる人々はその景色の美しさに驚嘆し、陶醉してしまいます。

秋先は植物を育てるために、色々な肥料や、道具や、苗などにお金を惜しみませんでした。自分自身は、いつも粗末な食事をし、質素な服を着ていました。秋になると庭の植物がたくさん実をつけますが、それらは近所の人たちや、友達に分け与え、それでも残るものがあれば市場で売りましたが、儲かったお金はいつも貧しい人々に上げてしまうのでした。

このようにして秋先は日々を過ごし、町の人々から[花痴]と呼ばれていました。(続く)

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。

又‘わんりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

前号で書いたように、青島市の歴史を見ると、その昔は青島という地名は表われず例えば秦のころの歴史地図を見ると「瑯琊^{ろうや}」や「即墨^{そくぼく}」の名が出ている。どちらも昨年の旅で足を延ばしたかったところだが、市の中心から遠く日程上行けなかった。この二つの街は、歴史上の有名な人物や故事と深い関わりがあるのである。それぞれ簡単に触れてみたい。

まず「瑯琊」は、秦の始皇帝の行幸したところである。地図で見れば膠州湾^{こうしゅう}の南西の方角に当たり、青島市全体からは南端に位置し黄海に臨んでいる。始皇帝は各地を巡幸し、行く先々で石碑を建て、天下を統一した自分の功績を彫りこませるのが常であった。ここ瑯琊にも石碑を建てている。

彼は海のない街で育ったためこの地が気に入ったからか、あるいはこれから述べる健康上の理由からか3度も訪れている。おそらく後者の理由と思われるが、自身の健康に自信がなかったのか不老長寿の薬を強く求めた。そして日本でも有名で伝説の人物でもある徐福に東方の蓬莱という島を目指させ、薬を探そう命じている。そしてBC219年には徐福を見送るためこの地に「瑯琊台」を造らせた。ガイドブックなどの写真を見ると、彼が東方を指さしているように見える像が置かれている。

次に「即墨」であるが、この街は始皇帝が国家統一する前の戦国時代、齊の武将・田単の「火牛の計」で有名である。ご存知の方が多かろうが、以下のような故事である。〈BC284年、燕という国が齊の首都・臨淄^{りんし}を攻め占領した。田単はかろうじて即墨に逃れた。この城の城主は燕を迎撃したがあえなく討ち死にした。そして城中で善後策を協議した結果、田単を將軍として城を守ることになったのである。彼は千頭の牛を用意させ、角には刀剣、尻尾には松明を括り付け、夜中に城壁の開けておいた穴から牛を引出し、松明に火をつけるという乾坤一擲の策を用いたのである。荒れ狂う牛の突進に燕軍は、角で刺殺されたりして壊乱した。田単は奪われた城をこ

とごとく奪回し、これにより時の齊の襄王から功績を称えられ、安平君に封じられた。〉

ところで日本でも源平の合戦でこの策を木曾義仲が実行したとされる。1183年の倶利伽羅峠^{くりにがら}(石川県と富山県の境にある峠)の合戦で、火牛の計を用い夜襲をかけて平維盛軍を打ち破ったと言われている。以上二つの街の故事について述べたが、では青島という地名の由来は何かと調べていると、友人のMさんが制作されたお手製の本である「青島短期留学記」に次のように書かれてあった。

〈パンフレットによると、1898年(明治31年)にドイツが膠州湾租借条約を結んだ時、沖合の島(小青島)の名から青島となったとある〉

この小青島は青島湾に浮かぶその名の通り小さな島であるが、今は陸続きになっている。私は行ったことがないが、あの青島市のシンボルである栈橋からすぐ近くに見える。

さて青島市での2日目は、道教の聖地である「嶗山」に行った。嶗山は市の中心部から東に約40km行ったところにある。前回紹介した成都市の「青城山」も道教の聖地であるが、さすがに道教発祥の地の中国では各地に道教の聖地がある。日本では道教の聖地は聞いたことがないが・・・。

今、この原稿をお正月に書き始めている。歳を取ってきたせいかもしれないが、近年七福神めぐりに興味を持っている。七福神はいずれも身近な神様ばかりで、若いころはその殆どが日本古来の神様とと思っていたが、実は日本古来の神様は恵比寿様だけである。残りの六神のうち、三神はインドの神様、三神は中国の神様でその中の「寿老神」と「福祿寿」は道教が起源の神様である。道教がどのようなルートで日本に入ってきたのかは知らないが、意外なところに影響を与えているのに驚かされる。昔から日本人は外来の文化、宗教、習慣などを素直に受け入れてきた(一部は軋轢もあったが)心の優しい国民である。現在世界の各地で宗教が原因の紛争が多発してい

るが、日本を見習えば平和がもたらされるのではと
思ったりしている。七福神めぐりも、どの神様に対
しても平等に敬意を払い手を合わせるのである。あ
の国はいやだからあの神様にはお参りしないなどと
心の狭い考えは誰も持たない。昨年私は、「日本橋
七福神めぐり」で心を清め、今年の正月は「浅草七福
神めぐり」で世の中の安寧を祈った。

さて前段が長くなったが、朝8時半にホテルを
出て近くのバス停からフロントで教えてもらった
304番のバスに乗った。運賃はたったの1元である。
40kmを1元では申し訳
ない気持ちとなる。バスは
海沿いに約1時間余り走っ
た。途中嶗山の風景区の一
つである「石老人」とい
う名勝地を過ぎる。バスか
らは見えないが、海中から
老人が立っているような岩
が出ているとのこと。いわ
れがあるようだが後でガイ
ドに聞いても適切な答え
が返ってこなかった。

ようやくターミナルに
到着してバスから降りる。
すると現地ガイドが大勢
いて、皆客の取り込みに
忙しい。私のところにもガ
イドが来たのでガイド料
を聞くと、意外にも安く
て50元だというのでお願いした。いろいろ話をす
るうちに嶗山の風景区はかなりの広域でいくつものル
ートに分かれているらしいことが分かった。その中で
太清宮のある太清景区をすすめるのでそこに行く
ことにした。このルートの切符売り場に案内されて
買ったが130元と結構高い。ここまでのバス代はタ
ダみたいであったが、これからなんだかだととられ
る予感がする。

ガイドは太清景区行きのバスに案内し、乗るとす

ぐバスは発車した。バスの進行方向右は青い海が見
え、反対側は岩山が続きどちらも美しい。10分くら
い乗って着いたところから海沿いの散歩道を行く
と、前方にこんもりした森が見えてきた。観光客は
みなぞろぞろそちらに向かっている。そのうち石畳
の広場に出た。正面に中国独特の石造りの門があり、
上の方には「嶗山太清宮」と彫ってある。この太清宮
は嶗山にあまたある道観の中で一番規模が大きく、
もっとも古い歴史を誇っている。前漢の武帝の時代
にはすでにこの場所に神を祀る廟があったというか

ら2千年以上の歴史を持
つことになる。

石の門をくぐり入場口
で20元支払い、左右の建
物を見ながら奥に進む。す
ると大きな建物の前に出
た。みな跪いて熱心に拝ん
でいる。そばに線香売り場
があるので見てみると、例
の大きな線香が最低でも
100元なので買うのはや
めて手を合わせるだけに
した。ガイドが次は「明霞
洞」に行きます、と言って
また別のマイクロバスに
乗り込んだ。しばらく走っ
て「嶗山太清索道」と看板
があるロープウエー乗り
場に着いた。索道とはロー

プウエーのことだ。ここでまた80元の切符を買わ
される。80元は当時のレートでは約千円である。少
し並んで乗り込むとロープウエーは一気に上昇して
いく。少し霏がかかっているが視界は比較的良い。
岩山と緑のコントラストが本当に綺麗だ。いろい
ろな岩が迫ってくる。日本の緑に覆われた山も綺麗だ
が、中国に多い岩山はどこも絵になるくらい美しい。
嶗山は、「国家5A級旅游景区」と最高レベルの観光
地と書いてあったが、その名に恥じない景観である。



嶗山太清宮・石門の前で(筆者)

ところでロープウエーのチケットの裏側を見ると、いくつかの注意事項が書いてある。そこには、心臓病、高血圧、高所恐怖症のひとは乗車禁止とある。私は、高所恐怖症だから本来乗れなかったのだ、などと思っているうちに終点に着いた。そこから石段を20分ほどさらに登ると「明霞洞」に着いた。ここまで来ると真夏であったが少し涼しい風が頬を撫でる。この洞は覆いかぶさってくるような大きな洞窟で昔の道士の修行の跡地だそうだ。夾竹桃に似た花が咲き乱れていた。ここでも5元とられた。最初に



龍潭瀑

130元払ったのに行く先々でお金をとられる。それなら最初に300元とか400元にしていちいち追加料金を払うのはやめてほしいと言いたいが、言っても仕方がない。

またロープウエーで下に降りると、「昼食にしますか」というので大分歩き疲れたことだしお昼にすることにした。するとどこからかマイクロバスが来て、これに乗れと言う。どこに行くのかわからないまま、海沿いの坂道を何度か上り下りするうちに、あるレストランに着いた。あまり綺麗な感じではない。二階に上がってテーブルのメニューを見るとどれも高そうだ。今更違うお店という訳にもいかないので、ある魚を指さすと女店員はすぐメニューを下げ奥の方に行った。

15分くらい経っただろうか、大きな皿に大きな煮魚が一匹のったものが運ばれてきた。別に野菜の料理やスープやごはんが運ばれてきた。私が野菜の料理は頼んでないというと、女店員はこの魚料理についているのだという。ご飯は例のアルミ製の丸い器にぎゅっと詰まっている。ご飯とご飯がくっついていて持ち上げると塊のようになってくる。量がたくさんあればいいというものではないと言いたいが、中国各地を旅行するとこんなご飯をよく出される。食べ始めたが如何せん量が多すぎて大分残してしまった。

「買単(マイタン)」というと店員はすぐ伝票を持ってきた。見ると300元近い数字が書いてある。何か

の間違いかと思い、確かめるとこの通りという。日本風と言えば煮魚定食が、当時のレートで換算すると4000円近いということである。後でガイドに「この店は高すぎるではないか」と文句を言ったが、どこ吹く風の様子であやまる気配もない。おそらくこの店からバックマージンをもらうのかもしれない。うかつにガイドに任せただけが悪いということであろう。折角の楽しい旅に少し水を差された気分になった。食後、「龍潭瀑」の入り口のところでガイドに50元を渡し、別れを告げた。

入り口からまた石段を20分くらい登ると大きな滝が見えてきた。幅の広いネクタイに似た滝で、落差は20～30メートルくらいありそうだ。水量も多くなりの迫力であった。石段の左右には土産物店が立ち並び、観光客をしきりに呼び込んでいた。

この滝を最後にホテルに向かうことにした。ここからホテルまでは2時間程度かかるからだ。行く先々でいつも思うがやはり中国は途方もなく広い。嶗山全体では景区が10か所あまりあるようだ。すべて見るには1週間程度かかるのではないか。ホテルに戻って改めて地図を見て確かめると、本日の行程は嶗山全体のほんの一部であった。昼食ですこしいやな思いもしたが、これも思い出のひとつである。夕食は簡単に済ませ、明朝早いので荷物を整理して早めに休んだ。次回青島にいつ来られるかわからないが、次回はまず「嶗琊」と「即墨」に行こうと決めた。

(青島の項終り)

最後に成都で過ごした数日の記憶はあまり残っていない。日本への帰国をギリギリまで延ばす為、ピサ切れの最終日に帰国便のチケットを手配した私だったが、持て余す時間を埋める為一度近場の観光地に足を延ばした以外、ひたすら広い街の中を歩き回り、都会の空気に疲れていた事の他にこれといって思い出せることは何も無い。

だが今回の一月半の旅を経て私がこれまでに抱いていた中国という国に対するイメージは大きく変化した。2度の中国滞在では四川省にしか訪れていないので他の地方に関しては未知の事だが、過去に読んだ数々の旅行記や旅人達の噂話から抱いていた一般的な中国の印象とは裏腹に、この四川省という土地で出会った人々はチベット族、漢民族を問わず、何処も温かく私を迎えてくれた。

それを決定的に印象付ける最後の出来事は、出国の為に訪れた空港での事だ。チェックインを済ませた私は、出国カウンターを通る前に空港内の土産物屋のCD売り場に足を運んだ。実はそこにやってきたのは2回目で、前回先に帰国する母達のグループを見送りに来た際、店外に流れていた歌謡曲の印象的な旋律に心引かれた私は、その場で店員に頼んで流れている曲名を手帳に記して貰っていたのだ。

日本への帰国のこの日、使い残りの中国元の整理も兼ねて、あのCDを旅の思い出に買って帰りたいと再びその店に立ち寄った。ところが私が手帳に記された曲名を見せ、店員に取り出して貰ったCDの価格は、あろう事か私の持っている中国元全てをかき集めた額よりたった一元だけ高かったのだ。

ええ~~~~!! ずっとこのCDを買うのを楽しみにしてたのに~~~~!!!

思わず涙目になって途方に暮れる私を見ていた店員の女性が笑いながら言った。

「いいわ。一元は私のポケットマネーで出しといてあげるから」

「え？」

「いいわよ、持っていきなさいよ」

えええ~~~~!! 空港の売店で働く職員さんがこんな事言ってくれるのお~~!? なんて事だろう、やっぱり四川省の人ってすご〜く優しい!!!

あまりの嬉しさに飛び跳ねて喜んだ私は、お姉さんの手を握り、何度も何度もお礼を言って店を出た。欲しかったCDが手に入れられた事も嬉しかったが、それより何よりこれまで多くの人の善意に支えられて続けてきた旅の最後まで、こんな素敵な思い出を残してくれたCD屋のお姉さんに、ただひたすら感謝! 感謝! だ。

これでますます四川省が好きになった私は、今回の旅の大成功に至極で満悦な気分となり、飛行機に乗り込んだ。これで万事めでたし、めでたしと思っていたら、旅の思い出はまだこのままでは終わらないのだ。

当時、成都から日本の成田までの便には直行便が無かった為、私の手配したチケットは北京でのトランジットとなっていた。

成都からの国内便が北京に到着すると、日本に向かう乗客は一度飛行機を降ろされ、空港のラウンジに通されて国際便のフライトを待つ事になるのだが、国際便に乗り換える乗客は待合ラウンジに入る前の小部屋にあるカウンターで、出国カードを記入し提出しなければならなかった。そのカードを記入する為、私は手荷物として手に持っていた、登山用の杖をカウンターの下の棚に乗せたのをすっかり忘れたまま、出国カードを提出し隣の空港ラウンジの部屋に移動してしまったのだ。ラウンジのソファに座り、ふう! と一息ついたところで、自分がこれまでずっと握りしめていた杖がなくなっている事に気が付いた。

あ! 忘れた! 先ほどの部屋に戻ろうとすると、ちょうど空港職員の女性スタッフが最後の乗客を送り出し、ラウンジに至る通路のドアの鍵を閉めたところだった。

「すみませ〜ん! 忘れ物しちゃったんだけど」職員が立ち去る前に間に合った安堵で、笑顔を見せながら私が声をかけた瞬間、「はああ?」眉間に皺を寄せ、不愉快そうに顔を歪めた女性スタッフは、怖ろしく陰い顔で「何よ?」と聞き返した。

「中に忘れ物したんです」

「駄目よ」

「え?」

「もうドアの鍵をかけたわ」

「だって鍵は手に持ってるんだし、ちょっと開けてくれたって・・・」

「駄目だって言ってるでしょう!」

「そこを何とか…」

出国カードを記入したテーブルはガラスの壁を通して直ぐそこに見えているし、垂丁やこの旅の先々で一緒に登山した思い出が籠っている杖だ。そう簡単に諦めたくない私は立ち去ろうとする服務員にしつこく食い下がると、その女性服務員は般若のように顔を歪め「あ～～～っ!!! 面倒臭いわねえっ!」と怒鳴り声を上げながら、乱暴に手に持っていた鍵を差し込んで、やっと隣の部屋との間のドアを開けてくれた。

こんなやり取りする方がよほど面倒だし、たかがドアを開ける位の事で、そんなに鬼みたいな顔して怒鳴らなくても・・・それまで出会う人ごとに優しくされ続けていた私には、ちょっとしたカルチャーショックだった。

これはまさに噂に聞いていた幻の中国人そのものだ。ついに出会ってしまった。怒鳴りつけられ小さくなりながらも、やっと扉を開けて貰えた嬉しさで、件のカウンターに駆け寄ったのだが、杖は私の目を離れたほんの一瞬の間に誰かに持ち去られてしまったのか、それとも職員に片づけられてしまったか、既に姿を消していた。これではどうしようもない。できれば部屋の奥のスタッフルームにいる空港職員に忘れ物の有無を尋ねたかったが、部屋の入口では般若のような顔をした女性服務員がこちらを睨みつけているし、ションボリと元のラウンジに戻るしかなかった。

扉の脇では件の服務員が苛立ちが頂点に達したような顔で私が戻るのを待っていた。「謝謝…」何はともあれ、ドアを開けて貰った事に対するお礼の言葉を掛けた私に、服務員は怒りに顔を歪ませながら「全く、余計な手間かけさせやがって!!!」と吐き捨てるように言った。

思い出の籠った杖を失くした悲しさと服務員に怒鳴りつけられたショックで、先ほどまで膨れ上がっていた風船が小さく萎んでしまったような気分だ。失せ物は自分のせいなので仕方ないにしても、これが四川の空港だったら、服務員は直ぐに笑顔でドアを開けてくれたに違いない。それは勿論個人の性格差もあるのだろうが、少なくともこの旅の間中でそんな態度の人に出会ったのはこの時が初めてだ。土地が変わればこうも人種が違うのかと、改めて中国国土の広さを再認識させられた事に舌を巻く思いだった。

失くした杖はそもそも私が初の本格登山である富士山に挑んだ時に¥100ショップで購入した、単に杖の形に加工された木の棒だったが、どれ程つまらない

物だろうと初の富士登山や今回の旅の間中を共に歩いた思い出が籠っていた。垂丁で最後に山を下りた時出会った馬方のおじいさんが「ほう～これはいいなあ～」と羨まげに私の杖を手にとった時、余程そのおじいさんにあげようかとも思ったのだが、何しろ旅の道中をずっと一緒に過ごした杖には、それすらも躊躇したくらの愛着があったのだ。

ああああ～～～～、こんなところで失くしてしまうなら、あの垂丁のおじいさんにあげれば良かったああ～～～～～～～～～～・・・激しい後悔に気持ちが沈んだ。まったく最後までジェットコースターのようにアップダウンの激しい旅だ。すっかりションボリしてしまった私だが、こんな事で楽しかった旅の最後の気分をつまらなくしたくない。まあ、いいや。最後の最後に噂に聞いていた伝説的な中国体験ができて面白かったという事にしておこう。気を取り直して思い直せば、確かに先ほどの女性服務員のキレっぷりは話題性十分に面白かったし、これでまた一つ旅話の種が増えた訳だ。

国際便のフライト時刻となり、いよいよ日本に向けて飛び立つ飛行機に乗り込んだ。私の席の隣には日本の東北地方から旅行に来たという中高年のおばさん達のグループが明るくワイワイと賑わっていた。中でも一際明るい私の隣に座っていたおばさんが早速私に話しかけてくる。

まあ! あなた一人で旅行? 怖くないの!? 何処に行ったの? 私達は九寨溝に行ってきたのよ! きれいだったわあ～～～、ずっと憧れてた夢がかなったのよお～～。

いよいよ旅を終え日本の現実世界に戻らねばならない喪失感と、杖を失くしてテンション下がり気味の私には、最初はちょっぴり疎ましく思っていたおばさんだったが、徐々に開けっぴろげに素直で明るい人柄に心がほぐされ、途中からはすっかり親しみがわいてしまった。

お菓子を分けて貰ったり、機内食の感想を言い合ったり、機内で放映されていた中国映画を退屈しのぎに皆で鑑賞し、ねえ、多分あれが娘の母親なのよ。きっと都会に行くのを反対されて喧嘩してるんだわ。あー、恋人と結婚したんだ。あれ? いつの間に子供ができたの? と、訳が解らないながらも皆の想像で映画のストーリーを組み立てて、かしましい映画鑑賞は大いに盛り上がり、日本に着く頃にはおばさん達との別れに名残惜しささえ感じた程だ。

いつも旅の空を日本に戻る飛行機の中では、旅が終わってしまった空虚感と脱力感に苛まれるのが常だが、今回に関してはおばさん達のおかげで最後まで十分楽しく過ごさせて貰った。そうして飛行機が成田に到着し、出国ロビーを通過してエアポートリムジン乗り場に向かってもまだ私の幸運は続いていた。

日本時間で深夜間際に到着予定だった私の乗っていた飛行機は、多少定刻に遅れての着陸だったのが、終電間際の遅延のお詫びという事らしく、バス乗り場に辿り着いて私が聞かされたニュースは、新宿まで¥3000程かかるリムジン代金はサービスとの事だ。

これまでの貧乏旅ですっかり節約根性が身についた私に、これは興奮の大幸運だ。

えええ~~~~~!!! やった~~~~~!!!

チベットの神様に見守られ、多くの人の善意に助けられて続けられた今回の一人旅は、これで大団円だ。最後の最後の最後まで、やはり私の旅は最高にツイていた。

(終り)

📖 追記

日本に到着してから暫くは違和感でいっぱいだった。

成田空港で入ったトイレは人の気配を察知して自動的に便座の蓋が上がり、用が済んで立ち上がれば自動的に水が流れる。洗面台の蛇口もしくり。手を差し伸べればセンサーが察知し自動的に水を流す。いったいこんな事が人の生活にとり、どれ程必要であるのだろうか？

そう遠くない過去の時代には、人は自ら水を汲み、マキを割り、火をおこして暮らしていた筈だ。それがホンの数十年の時を経て、現代の人間はトイレの蓋を持ち上げ、水を流す事さえ自身で行う事を厭うようになったのだろうか？ 少なくとも私は、「それくらいの事自分でやるから結構です」と申し上げたい。たったこれだけの事の為に、いったいどれだけの自然に犠牲が払われ、無駄に電力が消費されているのだろう。

2011年の大地震により福島原発では深刻な事故が引き起こされ、被災し避難を余儀なくされた人々は故郷に戻る事も叶わず、放射能汚染の影響による恐ろしい健康被害が今後どれ程日本の未来に影を落とすのか、その程度は未だはかり知れない。そんな事態に直面しても、まだ余計な贅沢をする為の電力を得る為に原発の必要性を訴える人々の存在がある事に、私は驚きを禁じ得ない。

自分たちのつまらない利便性や無駄な快適さの為に、

どれだけの犠牲が払われているのか、それすらも考えが及ばない人々とはいったいどれほど鈍感で無知で無神経で想像力が欠如しているのだろうか。誰かが言っていた。「電力が足りなければ経済が発展しない」。これ以上、経済が発展して、国民はいったい何が得られるのだろうか？ 経済など発展していなくても、幸せに暮らしている人たちはこの世界にごまんと存在する。昭和から平成に時は移り、昭和から平成に時は移り、日本社会は経済発展に向かって一目散に走り続けてきた。人々の暮らしは利便性と娯楽と快適さにおいて飛躍的に進歩を遂げた。が、その結果人々は幸せになっているのだろうか？ 経済の発展を追い求める事で潤っているのはいったい誰なのか？ 原発の問題のみならず、様々な分野で人間の無駄な贅沢欲を満たすためだけに、かけがえない多くの自然が失われ、多くの動植物が絶滅した。他の生命体にまで壊滅的な打撃を与えて尚、知らん顔をして経済発展など目指すのは、地球規模での犯罪行為ではないのだろうか？

地球上に暮らしているのは我々人間だけではない。

人間などこの地球上に自然の一部として暮らす、多くの生命体のほんの一種であるだけだ。今回記したこの旅を経て、今の現代社会の現実に思いを馳せるたび、私の脳裏には、厳しい自然の中、布でくるまれたテント一枚の中で生活し、水牛の糞で暖を取りながら野原を走り回っていた子供達の明るい笑顔が掠めていくようになった。

‘わりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしくお願いします。尚、新年度の会費の納入は、3月一杯にお願いできれば有難いです。また、新入会を歓迎します。

**年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’**

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会されると

- ①年10回おたよりをお送りします。
- ②‘わりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わりい’をpdfファイルでお送りします。こちらは無料です。



写真1 元首絹蝶 *Parnassius cephalus*



写真2 婀灰蝶 *Albulina orbitula*

四姑娘山では多くの蝶を観察できますが、取分け標高4500m前後で稀に見掛けるウスバアゲハ属の蝶は感動的です。空気が薄いためか飛ぶ姿は艶やかと言うより重々しく動きが鈍い感じがしますが、赤や青の斑点を配した白い大きな羽が大変印象的です。写真1は当地で“元首絹蝶 *Parnassius cephalus*”と呼ばれる蝶で、イワベンケイ属の高山植物が多い鞍部に至る気流が穏やかな谷筋で見掛けます。

ルリシジミの仲間は四姑娘山に多い蝶の一つで標高2000m～4000m位まで広い地域で見られます。写真2は当地で“婀灰蝶 *Albulina orbitula*”と呼ばれるウスユキルリシジミ属の蝶で、色とりどりの高山植物の花を飛び渡る姿が大変綺麗です。

日本の国蝶の“オオムラサキ *Sasakia charonda*”も居ます。写真3は標本の写真です。私が四姑娘山へ日本から毎年通っていた1990年代に、四姑娘山東側山麓の臥龍に有った旧博物館周辺で売られていた蝶標本が珍しくて沢山買った物の一つです。1990年代は四姑娘山へ至る道路が未舗装で状態が悪くなかったため蝶



写真3 オオムラサキ *Sasakia charonda* 標本写真

標本を買う観光客が少なく、地元の人が採取した蝶が僅かなお金で売られ貴重な現金収入になっていました（現在は蝶標本の採取も販売も厳しく取り締まられています）。

四姑娘山のHP 美しき蝶 : Beautiful butterflies

<http://rgyalmorong.info/scholaweb/butterflies/butterflylist-e.htm>
に他の蝶の写真が有りますので、ご興味があればご覧下さい。

他に

四姑娘山 ■ <http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

女王谷 ■ <http://rgyalmorong.info/> もあります

スリランカ・ケラニヤ便り ① ケラニヤ大学へ日本語教師として赴任

為我井 輝忠(ケラニヤ大学人文学部現代外国語学科・日本語教師)

12月3日あわただしくスリランカへ出発した。前日‘わんりい’のイベント^註が終了し、十分休む時間もなく出発したせいか、冬の寒さから一気に熱帯の季節に移動して大変戸惑いを覚えた。9時間ほどの飛行時間を経て、バンダラナヤカ国際空港に到着。空港ロビーでは大学関係者の出迎えを受け、予約していただいたホテルへ早速直行した。

翌日は再度大学の方々の案内で家探しを始めたが、あらかじめ3軒の家を見つけておいてくれたようで、順々に見て回った。1軒目は大きな家の2階部分を借りる形で、家具類はすべて整っていて、すぐにでも生活出来そうな状態である。2軒目と3軒目は家具が全然ない広い部屋だけのところで、これではあらゆるものを備えなければならないので、論外として1軒目の家を選んだ。

1軒目の家の持ち主にすぐ電話をしてもらい、借りたい旨を伝える。再度訪ねて話をした。持ち主は、Snil Kariyakarawana(スニル・カリヤカラワナ)という方で、ケラニヤ大学を卒業し、立教大学と一橋大学に留学した経験があり、また、ケラニヤ大学で教えたこともあるそうだ。現在はイギリスに在住し、この時期一時的にスリランカに帰国されているとのことだった。家賃は最初、月20000ルピー(16000円)との話だったが、少々高そうだったので16000ルピー(12000円)にしてもらい、その他電気代や水道代はこちらで払うと話合った。契約に際し、当初64000ルピーを払ってほしいと言われ、これは家賃4カ月分を前払いで払うのかと思って支払ったところ、後日分かったのだが、実は保証金のことだった。ここを出る時に全額返すとのことだ。一応何とか話しも付き、荷物を運び入れ、やつと安堵した。

1日置いて授業を開始した。私の担当時間は週9時間で、水曜日と日曜日は休みである。

1時間60分で、朝8時から始まり夕方5時に終わる。時間毎の休憩時間はなく、しかも昼休みもない。授業



スリランカ滞在中の私の住居

が全部連続して続く。私の場合は、少ない日は1日に1時間の授業だけの時もあり、あとは2時間ないしは3時間の日もある。午前中で終わる日があれば午後からの日もある。それはまちまちで、当初は毎日確認しながら出かけるようにした。私以外に日本人の教師は二人おり、一人は40代の男性、もう一人はスリランカ在住歴10年以上の女性である。スリランカ人の教師は4人いる。皆若い人ばかりで、恐らく20代後半から30代にかけての女性である。

学生たちはと言うと、日本と同様語学関係の学部・学科は圧倒的に女子学生が占め、男子学生は各学年に2人いるかどうかである。学部は3年までで、その上に大学院がある。各学年とも学生数は50人程であるが、常時出席しているのは3分の1位であろう。かつて教えたことのある中国の学生たちと比べると、熱心さと言う点ではやはりスリランカの学生の方が勉強していると感じる。ただ出席率はあまり良くない。たまに学生の方から〇〇の理由で授業は休みにしてほしいというような要求があったりして、驚いた。

私が担当している科目は、「漢字」(4時間)、「日本文化」(1時間)、「会話」(2時間)、「日本文学」(2時間)の計9時間である。移動もあるので1コマの授業は実質50分程度になってしまう。日本語関係の授業として他に「聴解」、「作文」、「言語学」、「日本語教授法」な

どがあり、これらは他の先生が教えている。

学生たちは大学に入るためにAレベルの資格を取っていて、そのために全員と言っていいくらいAレベルの条件である日本語も勉強してきて、ほぼ5年以上は取り組んでいる。学生に尋ねると、一番難しいのは漢字だそうで、彼らが書いている漢字を見ていると、確かに文字と言うよりは記号と言った方がよいかもしれない。「漢字」の授業に関してはテキストを利用している。音読み・訓読みの区別を説明したりすることもあり、なかなか大変である。他の授業はテキストを用いず、私の裁量で自由に行っている。ただ、「文学」は『源氏物語』、『平家物語』、『枕草紙』、『徒然草』、『今昔物語』をやってほしいとのことで、もちろん原文では難しすぎるのでほぼ現代風になったものを、その有名な箇所だけ講読している。例えば、『源氏物語』は、冒頭の「何れの御時にか。女御、更衣あまたさぶらひ給ひけるなか、いとやんごとなき際にはあらぬが優れて時めき給ふありけり」から始まる、「桐壺の更衣の巻」を現代語訳で学ぶ。

この大学の特徴は、全ての学生は主科目として3科目を選択することになっている。人文学部系の場合、例えば日本語を学んでいる学生は、日本語以外に韓国語や中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語等の外国語から一つと、さらに観光学とかビジネス英語、言語学、シンハラ語、ヒンディ語といった専門科目の中から(実際はもっとある)一科目を選択する。学生にとってはなかなか大変そうである。日本語以外は他の外国語を学ばない学生もいる。恐らく他の教科で代用しているのかもしれない。

今は(1月31日現在) 期末試験の最中で、授業が1月12日に終わり、1週間自宅学習期間があった後、2月10日まで試験が続く。試験が終われば3月1日から新学期となる。ただし2012年度は学生と教職員双方のストライキがあったせいで、かなり日程が遅れているそうである。例年なら、12月中に授業と試験が終わり、1月からは学期休みに入っているようだ。1か月遅れているわけだ。

こんなふうにしてスリランカでの生活も2カ月が過ぎようとしている。いままでは旅行で何度も来ている

が、実際に現地で生活するとなるとなかなか大変である。観光旅行ならばいいホテルに滞在し、車で優雅に移動するような旅行をこれまではしてきたが、今は車を利用することなどはなくなり、日常生活ではすべてバスを利用している。少しずつ慣れてはきたが、まだ戸惑いを覚えることも多々ある。そんなことを次号で紹介してみたいと思う。

(続く)

註：『町田市「つながりひろがる地域支援事業」・つながろうひろがる地域の「輪」と「和」/聞いてみよう! 鶴川に住む留学生たちのスピーチ!! 楽しもう! 中国の民族音楽と歌』

ケラニア大学・風景



スリランカの棚田

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

棚田という思い浮かべるのは、山の急斜面を利用して連なって作られた小面積の田んぼ、線状に植えられた緑の苗、機械化出来ない手作業の農耕、そして田んぼ毎の水面に浮かぶ月影、このような風景だと思います。アジア各地の写真等でみても、こんな場所にまで田んぼを造るのは大変だったろうなと感心すると共に、田んぼの連なりの美しさに魅了されてしまいます。

この様な、英語で 'ライステラス (Rice terrace)' と呼ばれる棚田がスリランカにもあります。但し、上述の如くイメージする棚田とは違って、山の急斜面に作られたものではありません。スリランカの平野地域と山岳地域の間辺りの緩斜面の丘陵地域でよく見られる棚田です。

スリランカの場合、山岳地域の開墾されている急斜面は殆どが紅茶畑になっています。棚田の定義というものでもあって、急斜面にある田んぼを棚田と呼ぶのであれば、スリランカの棚田は高低差がある田んぼが連なるだけなのですが、本文では棚田と呼ばせて頂きます。実はスリランカの山岳地域にも多少の田んぼがあります。平野部では水牛を使って農耕作業をしている光景も見られ、これらの地域では機械化も進んでいます。今回は無理矢理かも知れませんがこれら丘陵地域で僕が見た田んぼを棚田と呼んで紹介させていただきます。

僕は建設会社に勤めていましたので、新たなプロジェクトを求めて、幹線道路から外れた田舎道を車で走る機会が多くありました。赴任してから半年ほどたったころ、丘陵地帯の田舎道を走っていると、山の斜面の上手から高低差が40～50cmぐらいで仕切られた田んぼが連なって、僕たちの方向に下りて来ていました。さらに、道路を挟んで下手方向を見ると田んぼが連なって、どんどん下りて行きます。車の前方も後方も同じ光景です。田植えが終わったばかりだった頃で、上手側はよく見えませんが、下手側には植えたばかりの緑色の小さな苗と、日本で見慣れていたものと比較するとかなり細い畦道、一つの田んぼから直ぐ下の田んぼに水を注ぐ通

水溝を見ることができました。田んぼの水がキラキラ光ると、小さな緑色の苗のとのコントラストが実に綺麗です。

あまりに見事な光景だったので、運転手のウダヤ君に車を停めて貰って、見入ってしまいました。「綺麗なパディー (Paddy = 田んぼ) だね」とウダヤ君に言うと、こんな風景の何が珍しいんだという呆れた顔をして、「この様なパディーならスリランカの何処にでもある」という返事が返ってきました。

僕は、それまで何故気が付かなかったのだろうと考えてみると、田植えの直後に通る機会が無かったからでした。スリランカでは田んぼの60～70%で二期作が行われ、稲刈りが終わると直ぐに田植えが始まります。そのために、この田舎道を何度も通っていたのに、背が高くなった稲ばかり見ていたのです。

田植えが終わったばかりの田んぼを見る事が出来た2～3週後に同じ田舎道を通る機会がありました。その日はたまたま雨が降っていて、雨量が道路の下を通っている通水路の容量を少し越えていたのでしょう。通水路から溢れた雨水が静かに道路を舐めるように渡って下手側の田んぼに落ちて行きます。綺麗な光景です。

きっと一番上の田んぼのそばに水源があるのでしょう。一番上の田んぼから二番目の田んぼへ、そして次の田んぼへと順々に、そして静かに確実に水は流れ落ちて来ます。僕の目の前の道路はまるで水を満たした一枚の棚田になってしまって上部から引き継いだ水を静かにゆっくりと次の棚田に落とすように見えます。この時もウダヤ君と車を停めて目の前を横切って行く、水の流れを見ていました。何だか車のタイヤで水の流れを踏みつけては申し訳ないと思ったからです。道路を跨いで上下に見渡す限り植えつけられた稲の苗は、前回よりも力強く少し背が伸びて緑も濃くなりました。

スリランカの人達は自分達の事を Big rice eater と呼びます。訳せば文字通り大飯食らいです。カレー

が主食ですから、米をたくさん食べるのは当たり前と言えそうですね。ところが、カレーが主食という理由もあって、かつてはスリランカでは稲作が盛んで米の輸出国でした。ところが最近米の輸入国になってしまいました。人口が増えた事もあります。後継者がいなかったり、都市部で仕事を探すなどで離農者が増えた事も一因になっています。日本と同じように幹線道路沿いの田んぼでは休耕田をよく見かけるようになってきました。

緑々とした水田の連なりの中にポツリポツリと雑草の生い茂った休耕田があります。スリランカの農村が近代化していく事は好い事なのですが、農村の問題をたくさん抱えている国に住んで居る僕が言うのはおこがましい事ですが、スリランカで棚田の中に休耕田が出現するような近代化は勘弁してほしいです。

余談ですが、「(癒しの風景) 棚田、千枚田の画像ギャラリー(日本、海外)」というサイトを見ると、スリランカの棚田はありませんが綺麗な棚田をたくさんみられますよ。

～スリランカに日本語教師として滞在中の為我井氏よりのお誘い～

スリランカ旅行に参加しませんか

‘わりい’の皆様、今年の夏はスリランカへいらしませんか。暑い時期に暑いところ行くのも面白いかと思えます。

時期としては、7月下旬から8月にかけての1週間ほどと考えていますが、ご要望があればもう少し長くすることも可能です。訪問地は、コロンボ、キャンディ、ポロンナルワ、アヌラダプーラ、ヌワラエリア、ゴール等の世界遺産地、そして可能ならばサファリツアーも加えたいと思います。

メインは、次のとおりです。

- コロンボからヌワラエリアまで列車の旅
- 紅茶園見学
- 4～5か所の世界遺産地を見学

費用は22万円程度を考えていますが、人数によっては多少の変動もありますので、ご承知おきください。ご希望があれば何でもお寄せください。

申し込み締め切りは5月初旬とします。

- ご要望とお問い合わせ：

為我井輝忠 tamegai1014@yahoo.co.jp

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に‘わりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。



モンゴル滞在日記 V

木之内せつ子

7月18日(水)

きょうで5日間の“ボランティア”も終わり、明日の朝には空路ウランバートルに戻る。1日5組くらいの親子と“面談”した。適切なアドバイスをできたとは思えないが、リハビリを兼ねて3日続けて来所した熱心な母子もいた。

リハビリ担当のサスターナ家の夕食に招待された。彼女はセンターからタクシーで15分ほどのホブド郊外のゲルに住んでいる。塙で囲まれた敷地内の何棟かあるゲルのひとつに案内された。そこがサスターナ夫妻のゲル。訪問してはじめて知ったのだが、ふたりともカザフ族。モンゴルは人口の80%くらいがハルハ族でカザフ族は数%。一昨日訪れたゲル博物館で、少数民族のゲルをたくさん見た中に、カザフ族のゲルもあった。カザフ族のゲルは他の民族のゲルに比べると、大きくて高さも3mくらいあり、入口は太陽が昇る東側にある(モンゴル式のゲルは南に入口がある)。ゲルの中は、華やかで美しい伝統的な刺繍が施された、寝具やタペストリーやクッションで飾られていた。彼らは敬虔なイスラム教徒で、夫は教会関係の仕事をしているとのこと。酒は一滴も飲まないというのに、私たちは迂闊にもアルヒをお土産に持って行ってしまった。食事の後で、彼はドンブラという洋ナシ型の弦楽器(カザフの民族楽器)を演奏してくれた。“親の会”の人たちとMはモンゴルの歌を歌い、最後は日本の歌を…ということになり、Mとふたりで歌ったのが“ふるさと”。

薄暗くなりかけた8時過ぎにお暇した。往きはタクシー2台だったが、帰りは1台しかみつからなかったので、“親の会”の人たちとツォゴウと私たちの総勢7

人が折重なるように乗り込んでセンターまで戻った。運転手をいれると8人、日本ではありえない!

7月19日(木)

朝の早い便で10日余り滞在したホブドからウランバートル(UB)に戻る。ツォゴウは8月上旬までホブドに残って弟のジェンコと過ごす。彼女の母は私たちと同じ便に乗る。

センターを出発する8時前には、“親の会”の人たち、リハビリ担当のサスターナ、初日に18歳の少女に付き添ってきた祖母の盛大な見送り(?)をうけて空港に向かった。ガイドブックには国内便でも3時間前には空港に着いているようにとあったが、私たちはモンゴルタイムだったので、搭乗手続きに遅れてしまった。知事の車の運転手が話をつけてくれて、無事チェックイン。飛行機にはモンゴルタイムがないことを学習した。

定刻にUB空港到着。連絡してあったダミは交通渋滞とかで迎えに来られないという。とりあえずタクシーでツォゴウの母親の家に行くことにした。彼女の家はモンゴル大学近くの集合住宅の11階。すぐ隣のスーパーで買い物をして、彼女が食事の用意をしてくれているあいだ、私たちはジェンコの部屋で彼の訓練器具や教材をみせてもらったり、シャワーを使わせてもらった。

ホブドではセンターに風呂もシャワーもなかったので、1回だけサウナに行ったが、それ以外は洗面所で清拭や洗髪をしていた。UBの私たちの宿舎では、洗面所にはバスタブがあるのだが、私たち日本人が蛇口をひねるときは、なぜかいつも温水が出てこない。だから短時間のシャワーですませていた。これも日本ではありえないことだが、慣れてしまえばそれほど苦にならなかった。それでも、ツォゴウの母の家での熱い湯の出るシャワーは嬉しかった。

夕方デルメが迎えにきてくれた。食事をしながら、デルメの通訳で息子のジェンコの話になった。ホブドでジェンコの滞在しているゲルを訪ねたときにも、ツォゴウの通訳でジェンコの成育歴、日常生活、将来に向けての課題など話をきいたが、彼女はもっと話をしたかったのだろう。そろそろ思春期のジェンコに母親としてどう向き合っていたらよいのか悩むことがあるという。Mが具体例をあげて話をしてくれるのを、納得して大きく頷いてメモをとったり、「ええ〜!それってちょっとお〜…」と戸惑った表情をしたりしながらも、かなり

つっこんだ話ができたと実感した。

これからは母親だけではかかえきれない問題も待ちうけているだろう。ジェンコの父は、秋には知事の任期も終わり、来春にはUBに戻ってくるかもしれないとのこと。そろそろ父親の出番かも…。それにしてもデルメの通訳はすばらしい。

7月23日(月)

UBに戻ってからの数日は、市内の美術館や博物館めぐりをして過ごした。

ゲルに泊まりたいという私の希望がかなって、きょうから3泊4日でテレルジのツーリストキャンプを予約した。テレルジはモンゴル人や外国人の旅行者がたくさん訪れるUBから車で2時間ほどの保養地だ。ホテルやツーリストキャンプがいくつもある。ザヤの運転で娘のスダリ(1歳半)、ザヤの友人のマントハイとムギとムギの娘のミッシェル(生後6か月)、それにMと私、総勢7人で出発した。

途中のスーパーで朝食用の食料を買って12時過ぎにキャンプに到着。20棟ほどの宿泊用ゲルと、別棟に清潔で明るいレストランとシャワー室とトイレがある。私たちは2棟のゲルに分かれて落ちついた。ゲルのドアを開けておくとリスが入ってきた。のどかである。それからレストランに昼食を食べに行った。オーダーしてから料理がテーブルに並ぶまで1時間以上も待たされたが、誰も文句ひとつ言わず、ゆったりとおしゃべりしながら待っている。欧米人も多く宿泊しているからか、料理の種類もバラエティーに富んでいる。ボリュームもあるので、数種類頼んでシェアする。

夜は冷える。セーターやヤッケを着こんでも寒い。薪ストーブを焚く。



カザフの民族楽器・ドンブラを弾くサスターナの夫

7月24日(火)

朝食後、車で15分くらいのところにある亀石までドライブ。自然の力で岩が削られて巨大な亀の形になった岩山だ。マントハイとふたりで亀の背中のゴツゴツした岩山を登ることにした。彼女に助けられて首のところまで登るとそこからの眺望はすばらしい。マントハイは、夏休みで今はモンゴルに帰省しているが、トルコの大学に留学中の医学生。4年生で将来はモンゴルに戻って小児科医になりたいという。留学先としてトルコを選んだのは、ヨーロッパや日本に比べて、物価が安く暮しやすいからとのこと。モンゴルの若者で、留学先としてトルコを選ぶのは、それほど珍しくはないそうだ。そんな話をしながらひと休みして岩山を下った。

キャンプに戻って昼食後、きょうはこの地域のナーダムということで見に行った。小規模のナーダムなので、モンゴル相撲、競馬、弓射を目の前で見ることができた。ここのナーダムは女性も弓射をするようだ。

7月25日(水)

ゲルの外で物音がするので目が覚めた。まだ薄暗い。ソーッと戸を開けて出てみると、牛がゲルのすぐ傍で草を食んでいる。隣のゲルの傍にもいる。食べ終わって朝靄の中を山のほうへ戻って行く牛もいる。薄着で飛び出してきてしまったので、着替えをしてまた出てみると、もう牛の姿はなく、朝日が少し射しはじめていた。

午前中、Mとマントハイと私の3人は馬に乗ることにした。10年以上も前に内モンゴルで一度乗ったことがあるが、そのときはお尻の皮が擦り剥けて何日も痛かったことしか覚えていない。私が不安そうにしているのを見た馬主が、自分も馬に乗り、私の馬の手綱を持って引っ張ってくれた。Mとマントハイはどんどん先をいく。30分ほど進み、その道をまた折り返して戻ってきた。帰りは助けなしで私も自分で手綱を持って、ちょっといい気分で馬を進めることができた。私が何の苦労もなく戻ってこられたのは、馬主がおとなしい馬を選んでくれたのと、馬は自分の家に帰るので、何の文句もなかったからだろう。お尻の皮が擦り剥けることもなく無事1時間の乗馬は終わった。

夕方、急に空が暗くなり、雷鳴が轟き、大粒の雨が降りだした。バケツをひっくり返したような大雨だ。四方を山で囲まれているからか、雷は上から下に落ちるの



ゲルの傍で草を食む牛(テレルジのツーリストキャンプで)

ではなく、右の山からゲルの上空を通過して、左の山へ落ちるように感じられた。2時間ほど続いてやっと雷は山の向こうに去り雨もあがった。ゲルの天井とストーブの煙突の隙間から雨が吹き込んでいて、ストーブの傍にあった薪も濡れてしまった。

7月26日(木)

きょうはもう午前中にチェックアウトしてUBに帰る。

今朝も牛が草を食べにゲルの近くまで来るかと期待して早起きしてみたが、牛の姿は見えない。それもその筈、よく見れば、私たちのゲルの近くの草は昨日までにあらかた食べつくされてしまっていて、土が見えていた。朝食にはまだ時間があるので、正面の低い山(丘)の向こうにはどんな景色が広がっているのかと、ちょっと散歩くらいの軽い気持ちで歩きだした。15分ほど歩いて頂上に着くと、そこからは別のツーリストキャンプのゲルが見渡せた。朝露でGパンの裾がグッショリ濡れてしまって重かった。

チェックアウトを済ませ、荷物をゲルから車まで運ぼうと外に出ると、後ろの山のほうからメー、メーと山羊か羊のような鳴き声が聞こえてきた。そしてしばらくすると羊が1頭また1頭と姿を現わし、草原を横切り向かいの森に消えて行った。羊はみなほぼ同間隔で同じペースで歩き、その行列は切れ目なくしばらく続いた。何頭くらいいたのだろうか。数えなかったからわからないが、とにかく数えきれないほどたくさんいたのである。羊を追う人間の姿は私の目では確認できなかった。人間よりも優秀な羊のリーダーがいるのかも…。

帰り道は交通渋滞にはまり、往きの倍ちかく時間がかかってUBに戻った。

(続く)

藁屋根の日の膨らみし重さかな

qūqū máo cǎofáng
区区茅草房wū jǐ tuō rì chéng zhòng liàng
屋脊托日承重量zhī yuán sù péngzhāng
只缘速膨胀

一面の菜花や遠くの海は紺

guǎngmào cài huā tián
广袤菜花田jǔ mù tiào wàng quán cǎn cǎn
举目眺望全灿灿yuǎn chù hǎi zhàn lán
远处海湛蓝

季语：日膨胀，春。

赏析：好一幅田园风光画！小小茅草房，屋脊街朝阳，作者担心，这硕大红日会把屋脊压垮吧。作品用语精致，构思新颖，情景交融，妙趣横生。

季语：菜花，春。

赏析：鲜艳夺目的菜花，清澄碧蓝的大海，构成了一幅美轮美奂的图画。黄和蓝都有了，读者眼中是不会不调和成那绿叶葱茏的世界吧！

松本杏花女士の俳句が「わんりい」に掲載されて何年になるでしょう。もう、10年を超えたかもしれません。日常のさりげない風景を生き生きと切り取った松本女士の句が好きでした。また、日本の俳句が中国に伝わり、中国で「漢俳」の一派が生まれ、年々盛んになっていることも女士を通して知ったことでした。お茶、お花そして国際交流と活発に活動していらっしやっただのですが、昨年8月、まだ60代の若さで急逝されました。女士への供養の気持ちから、ご主人さまにお願いして平成24年度一杯の掲載をお許し頂きました。最後の「一面の菜の花や…」は昨年3月号でも掲載した句ですが、おおらかで明快な句に松本女士の明るい笑顔が重なるように思います。ご冥福をお祈りして再度掲載します。(田井光枝)

智子の雑記帳 90

誰でもなりえる パワハラ・セクハラの実害者・加害者

パワハラ・セクハラ防止のための研修を受けた。3時間の研修後…、セクハラ・パワハラとは関係がないと思っていた自分は、誰もがセクハラ・パワハラの実害者・加害者になりうる、という考えに。単純な…、いや「優秀な」研修生である。

「パワハラ」は「上司が部下に対して行う」印象だが、実際には部下が上司に行っても、同僚間でも、受けた当事者が「パワハラだ」と感じたら、パワハラになりえる。「指導」「注意」「相手が悪い」と思っても、その伝え方によって、相手が過度にストレスを感じた場合、パワハラになる。指導の場合は、相手の仕事のやり方について注意することはセーフ。そこから、相手の人格否定に発展すると、アウトになる。例えば「こんな仕事のやり方しかできないお前はダメなやつだ」「以前にこんな失敗をしたお前だから、今回も信頼できない」などなど。ドラマで見かける、人前で、大声で上司が部下を叱責しているシーン。これも部下の立場や感情を配慮していないという点で、パワハラになりえる。

セクハラについても、受けた当事者が「セクハラだ」と感じたらセクハラだ。人によって、価値観は異なる。

こちらが「些細のないこと」「合意だ」「向こうも気がある」と思っても、相手もそうとは限らない。まずは、誤解を招く行為は一切しない。当然のことだが、配偶者のいる人は、不貞行為は絶対にしない、が基本。

逆に被害者になってしまったら、どうするか。まずは、一人で悩まない。一人で悩んでいるうちに、事態がどんどんエスカレートする可能性があるから。すぐに専門機関へ相談する(例えば、日本労働弁護団ホットライン 月・火・木曜日 15時から18時 03-3251-5363など)。また、パワハラ・セクハラ行為の日時、詳細を証拠として記録する必要もある。その場でのメモ、録音(盗聴には該当しないので、安心して録音していいとのこと)。また、職場の人事課などに相談するときは、書面で行う。気持ちが落ち込む人は、カウンセラーや診療内科へも行く。通院歴が、そのまま被害の証拠となる。

まずは、自分が加害者にならないように気をつけたい。つい感情的になっても、「大人な対応」を心がける。狭い職場、狭い日本。気遣いに疲れたら、ワイルドなアジアへ。(真中智子)

留学生たちのスピーチ 5

東北被災地支援のボランティアをして

国士舘大学21世紀アジア学部2年 ^{し おん} 施 恩 (中国上海市出身)

私は留学生として、日本の社会に貢献したい、私の力は微力ですが、無力ではありません。みんなの力を合わせれば、何でも乗り越えられると思います。東北がんばろう！日本がんばろう！そんな気持ちから東北大震災復興支援にも貢献したいと思いました。

そして特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21の呼び掛けに応募し、現地協力団体・特定非営利活動法人ジェンと共に私は東日本大震災被災地支援活動に参加しました。呼び掛けのポスターには「ボランティアを通じて、あなたの国と日本の「架け橋」になりませんか」という言葉が書かれてありました。

私はその言葉について深く考えました。「架け橋」という言葉について何回もほかの学生たちに訊いてみました。自分の国と日本の「架け橋」になるためには、何を為し、どんなを努力をすべきなのか？私は色々考えましたがなかなか正確な答えが見つけれませんでした。私の考えでは、両国に「架け橋」が掛かるということは両国がもっと仲良くすることです。

仲良くするためには、お互いをよく知り合い、そして尊敬し合い、理解し合うことなどが必要です。そのために、交流したり、勉強したり、メディアなどから正しい情報を得ること、また、東北支援のボランティア活動のように、みんなと共に汗を流すことが必要です。言葉の障害は問題ではありません、みんなの「心」と「心」の交流だと思います。

以下、三つの点で東北ボランティア体験について話します。

1) ボランティアをすることの喜びと励み

東日本大震災の被災者たちは、わざわざ自分たちのために遠方から来て暑い中で作業してくれたことへの感謝の気持ちから、自分たちの得意料理や冷たいお茶でもてなしてくれ、船に乗る体験などを用意して待っていてくれました。手作りのご馳走には、日本人が相手を思いやる気持ちが込められていました。

被災者の皆さんは今回の被災で私たちが体験してない厳しい体験をしました。だから、私たち留学生は笑顔

で被災者たちの歓迎の気持ちに応えて、元気や勇気などをあげたい。喜んでくれる相手がいるからこそ、がんばりたいという気持ちが強くなります。

私たちが、ボランティアをする東北石巻市の浜に来て、浜は賑やかになりました。笑う声が響き、地元の活気が戻りました。そして、被災地の「地域活性化」のために、私は地元がもっと盛り上がるようにしたいと思いました。

2) 交流

いろいろな国からの留学生同士の交流、地元の被災者との交流、ジェンのスタッフと一般参加者との交流、全体の交流。活動した三日間で、山ほど交流しました。いろんな言語を使って、いろんな表情で交流しました。ある留学生は自国の料理を作って、その料理でさまざまな話題が出ました。おいしい料理とビールで楽しい時間を過ごしました。いろいろな文化や考え方の違いも知って、異文化体験もしました。交流を通じて、国々の距離が近くなりました。

「留学生のパワーは強いね」と地元の方は方言のなまりが入る言葉を話しながら笑顔で接してくれました。やさしく満面笑顔のおばあさんとおじいさん、みんな、かわいくかっこよかったです。今も地域の人たちの声やボランティアのみんなの声が頭の中に浮かんできます。忘れられない素晴らしい思い出になりました。

3) 絆

私は今回のプロジェクトに参加したことで多くの皆さんと知り合い絆を結びました。東北支援活動を企画し私たちに呼びかけてくれた特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21と受け皿となってくれた特定非営利活動法人ジェンの2団体の皆さんとの「絆」、参加者同士の「絆」、地元との「絆」、私たちの国と日本との「絆」



など、沢山の「絆」で結ばれたことを感じた活動でした。

最後ですが、ボランティア活動で大切なのは「楽しむ」ことです。「楽しむ」ことは人生の宝物だと思います。小さい「楽しむ」でも、一日元気になれます、相手にも元気

を与えることができます。被災地支援のボランティア活動に参加できたことは、私にとって、大きな成長をもたらしてくれたと思います。作業は疲れるけれど、機会があれば、ぜひ、もう一度頑張りたいと思います。

留学生たちのスピーチ 6

日本で感じたこと

国士舘大学21世紀アジア学部1年 戴沢宇(中国深圳市出身)

みなさん、こんにちは。私は戴沢宇と申します。中国の深圳市から参りました。今、国士舘大学の一年生です。

私は日本に来て、もう2ヶ月経ちました。来たばかりのころ、まるで中国にいるみたいでしたが、日本の生活に慣れてきて、日本と中国の違いをだんだん感じるようになってきました。今日はその違いについてお話ししようと思います。

たとえば、いつも学校へ行く時、電車に乗ります。一度も、電車の中で、電話をかける人や電話に出る人を見たことがありません。それで、電車の中はとても静かですから、私は気をつけないといけません。

来てから二週間目に、日本語を教えてくれた先生に会いに行きました。横浜駅で11時に会う約束をしました。私は横浜駅へ行ったことがありませんから、ちょっと時間がかかりました。11時10分ごろ、私はまだ横浜駅に着いていませんでした。その時、電話が鳴りました。先生の電話でした。私は出るか出ないか、迷っているとき、電話のベルが止まりました。でも、すぐ「戴さん、今どこですか」という伝言を聞きました。私は気が気でなかったです。優先席のところに「優先席付近では、携帯電話の電源をお切りください」というマークがあります。ほかのところにはないです。ちょっと先生に返事したいですから、電車で電話をかけました。

そのあと、ついに、先生に会うことができました。すぐ先生に「電車の中で電話をかけること」について質問をしました。先生は「戴さんは電車に乗っていると思って電話を切りました」と言いました。やっぱり電車の中で電話をかけてはいけなかったのです。私はインターネットで調べました。優先席の付近で電話を使うことができます。なぜなら、妊婦と心臓病がある人のために、電話を使うことを禁止しているからです。法律で規制はされていませんが、それでも電話をかける人はいません。

日本人はいつもほかの人に迷惑をかけないよう気を付けています。これはすごくいい習慣だと思います。

それから、日本の公共の場にゴミ箱はほとんどないです。来たばかりの時は変だと思いました。どうしてゴミ箱がないのでしょうか。もし、ゴミがあれば、どうす

ればいいんでしょうか。でも、ゴミ箱がなくても、どこにもちいさいゴミが見当りません。町がきれいです。中国では

汗をかくと、ティッシュで拭きます。それに、中国の公共のトイレの中にトイレットペーパーがないですから、中国人はほとんどティッシュを持っています。ですから、私は日本に来て、いつもティッシュを持っています。どこか汚い時、拭くことができます。拭いた後で、ゴミ箱を探します。

一般的に、自動販売機の隣には缶のゴミ箱があります。ですが、ティッシュは缶のゴミ箱に入れることができません。私の友達にもこんな経験があります。私が友だちと一緒に電車を待っているときに起きたことです。友だちはりんごを食べた後で、ゴミ箱を探しに行きました。電車が来ましたが、友だちはまだもどって来ませんでした。次の駅で気がついた時、ティッシュで包んだあのリンゴはまだ彼女の手にありました。

また、日本ではきちんとゴミを分別します。寮に住む前に、管理者さんはどこにゴミ置き場があるか、燃えるものと燃えないものを分別して、違うポリ袋に入れるとか私たちに教えてくれました。学校でゴミを捨てる時、ちゃんとゴミ箱の名前を見て、捨てます。中国のゴミ箱はリサイクルできるかリサイクルできないか、二つの区別をしましたが、捨てる場所は二つあるところと一つしかないところがあります。日本ではちゃんとゴミを分別して、資源をよく再利用しています。環境を保護している国だと思います。日本はこのシステムが非常にいいと思いますが、中国ではこのシステムを採用するのは人数が多くて、ちょっと無理だと思います。

以上で、スピーチをおわります。皆さん、ありがとうございました。



世界平和のためにできること

国土舘大学21世紀アジア学部2年
タキルバシエワ・ケレザ(キルギス ビシュケク市出身)

平和という言葉を知ると戦争がなく世の中が平穏であることがまず頭に浮かびます。そして、友好的な人間関係、安らかで安定した生活、幸せな家族の姿を想像します。又は、身体に障害のある人に手助けをしたり、気を配ったりすることも平和という言葉と深い繋がりがあると感じます。こんな世界、友好的な人間関係を作るために何が必要なのでしょう。私たちはどんな人になるべきなのでしょう。何をしなければならぬのでしょうか。

歴史を遡ってみると15世紀の日本の応仁の乱、18世紀のフランス革命、1839年から1842年のアヘン戦争、1916年のキルギスの帝政ロシアに対する反乱、ロシア時代に引き起こされた数々の混乱など、どんな時代にも世界中では争いが起きています。人々は戦争がいかに恐ろしいものであるか深く考えていないような気がします。

今でも戦争はなくなった訳ではありません。シリアなどの血を流す戦争だけではなく、現代の戦争と呼ばれる形の戦争もみられるようになりました。それは情報戦争や原子爆弾開発競争などです。このような国々の競争が終わる日は本当に来るのでしょうか。前途が真っ暗になるということにわざわざお金や労力をかける必要があるのでしょうか。武器は普通の人々の暮らしには全く必要がないというのに、政府はそのことを知りながら無駄なものを作り続けているのです。

原子爆弾や様々な武器を持って軍事大国になることは、国を守ろうとする考え方もかもしれませんが、私はそれに反対です。原子爆弾を作らない！ということこそ政府の勇気ある決断だと考えるからです。それより、体に障害がある人や、恵まれない家庭や、児童養護施設の子供たちや、暮らしに困っている人々へ手を伸べ

ることが何より必要なのではないでしょうか。

私もその面から考えて、世界平和のために何かできないかと思うようになりました。中学校のころからコムスというキルギスの伝統的な弦楽器を演奏してきました。様々なコンサートで人々の喜ぶ姿や笑顔を見る



と、私も幸せな気持ちになりました。人を喜ばせたり、幸せにしたりするのは「心だ」と気付きました。例えば、楽しい曲を弾くと人は楽しくなり、悲しい曲を弾くと悲しくなります。楽しさや悲しさを感じる心は皆同じなのではないでしょうか。音楽で幸せを与えること、音楽を通して人間関係を築いていけることに気付きました。自分が作った曲で、原子爆弾や戦争などの悲惨さを国々の政府

関係者の心に訴えること、それは私にできることだと思います。戦争に関する活動を止めてくれることを心から願っています。優しい音楽で人々にこの世の中で平和を守る大切さを伝えたいのです。最初はうまく伝わらないのかもしれませんが、でもどんなことがあっても、挫けないで、あきらめないで伝え続けていきたいのです。

美しい自然も平和の一部です。鳥の鳴き声、湖の波音、木の葉が風で揺れる音、自然の中で聞こえる様々な音、これは全部「平和の曲」です。私も優しい音楽でこんな平和の曲を一人でも多くの人に伝えたいのです。一人でも分かってくれる人がいれば、その人から他の人へ、人から人へと伝わって、人の輪は大きくなっていくでしょう。平和な世界について考えてくれる人が多くなるでしょう。最初は小さな平和でも、どんどん・どんどん大きな平和へと繋がっていくことを心から期待しています。

シュワンヤンロウ(羊肉のシャブシャブ)で新年を祝おう!

2013年2月10日(日) 場所: 麻生市民館料理室



シュワンヤンロウのたれ作りは男たちの仕事
毎年任されて、おしゃべりしながらの手慣れた箸捌きだ

今年の春節は2月10日で、なんと 'わんりい' の新年会開催日が初めて「中国・春節」と重なりました。長年参加の一水会会員の洋画家・横内襄氏が、'わんりい' 新年会の文字や椿の花のイラストでホワイトボードを飾り付け下さりいつもより華やかな会場になり、風は冷たいけれど、春を予感させる明るい日差しの中で、47名の方々が集い賑やかにシュワンヤンロウ(羊肉のシャブシャブ)を楽しみました。今年の参加者は、昨年12月に 'わんりい' が主催した平成24年町田市「つながり広がる地域支援事業」参加の留学生らも加わり47名でした。

会場のあちこちで一年ぶりの再会を楽しむ光景



中国語で説明しながらの手品 説明は分からなくても見事な手さばきに参加者全員がやんやの拍手



美味しいものを食べる時は自然に笑顔がこぼれる



「北風吹」「月亮代表我的心」をバイオリンの演奏で歌う



お鍋を囲む時間は交流タイム会場のあちこちで話が弾む

が見られ、また今年は初めて参加の方も多く、新年会のにぎやかさに驚かれたり、シュワンヤンロウの美味しさに感動くださいました。恒例の余興タイムは、歌に

最後はこれまた恒例の、ビンゴと福引で今年の先行きを占い(?)、何時もながらの笑いが耐えない福引に、今年のわんりいの活動は「大吉」と確信し、最後は、河本さんの音頭で、3,3,7拍子を1回だけの「一本締め」で今年の新年会は無事に終わりました。



オペラ歌手の崔宗宝さんと一緒に「大海呵、故郷！」を伸び伸びと気持ちよさそうに歌う



余興のメは、参加者全員で「春が来た」「どこかで春が」を歌って、日本列島・北から南まであまねく春の到来を祈った



《'わんりい' 掲示板》

◆わんりいの催し

ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう！ Vol.5 / Vol.6

ボイストレーニングをして、日本人が長い間、親しんだ童謡や抒情歌などの愛唱歌を気持ちよく歌いましょう。

◆動きやすい服装でご参加ください

▲月日：3月19日(火)
4月16日(火)

▲時間：10:15～11:45

▲場所：まちだ中央公民館・6F視聴覚室

▲3月練習予定歌：1月「北国の春」
4月練習予定歌「茶摘み」、「早春譜」

▲講師：Emme(歌手)

東京芸術大学邦楽科長唄別科卒業。日本の伝統音楽・長唄の素養をバックにした、たおやかなオリエンタルヴォイスの独自の歌のスタイルを誕生させている。

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：15名(原則として)

●申込み：わんりい ☎042-734-5100
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



◆わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう！正しい発音で読めるように練習しよう！漢詩の時代的背景や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう！



▲場所：まちだ中央公民館6階、学習室

▲月日：3月の講座、年3月17日(日)学習室3,4
4月の講座、年4月28日(日)学習室1

▲時間：10:00～11:30

▲講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎050-1531-8622(わんりい)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

◆まちだ中央公民館への行き方 小田急線南口・横浜線ルミネ口徒歩5分 町田市原町田6丁目8-1 町田センタービル109 6F

◇わんりいの催し

キルギスのお正月を、ケレザさんと一緒に祝おう！
〈キルギス料理を作って食べよう会〉

キルギスって、どこにある国なの？ どんな国なの？ 講座日・3月21日は丁度キルギスのお正月、キルギスから日本に留学中のケレザさんと一緒にキルギスの代表的な手延ばしの麺・ラグ麺と正月用パンのトモモを頂きましょう！ケレザさんがキルギスの音楽を演奏下さったり、キルギスについてご紹介下さいます。



キルギスの国旗



キルギスの民族楽器
コムズを演奏するケレザさん

● **会場：まちだ中央公民館・調理室**

小田急線南口・横浜線ルミネ口徒歩5分
町田市原町田6丁目8-1 町田センタービル109 6F

● **2013年3月21日(木) 10:30～14:00**

● **参加会費：1500円(講師謝礼・会場費・材料費)**

● **メニュー：**

- ①ラグ麺(麺棒を使わず手延ばしです！男性の方も、是非!! マスターして特技にしよう!!
 ②トモモ(クルミ・蜂蜜・干しぶドウ入りパン/ キルギス北方のお正月では必ず食べるそうです) ③キルギス風サラダ ④ミルクティ



ラグ麺(イメージ)

*持ち物：エプロン・筆記用具

◆ **問合せ&申込み：☎040-734-5100(わんりい)**

「女子十二楽坊」第一期生メンバー

フォーンシャオチェン
霍曉君/二胡の調べ 2013日本ツアー

特別ゲスト：崔宗宝(バリトン)

● **海老名市文化会館・小ホール**

<http://ebican.jp/event/event.cgi?mon=201304>

● **2013年4月14日(日) 14:00開演**

小田急小田原線・相鉄線「海老名駅」西口
JR相模線「海老名駅」東口より徒歩5分

● **参加費：全席自由席：3,000円**

(当日席：3,500円 崔宗宝会員2,500円)

● **問合せ&申込：046-240-0836(崔宗宝音楽事務所)**

◆ **主催：崔宗宝音楽事務所 ◆ 共催：崔宗宝友の会**

烏里烏沙写真展 **浄土・聖地**

— チベットに生きる —



十数年をかけて、数十回ほど巡ったチベットで撮り下ろした中から作品約60点を厳選、チベットの美しい自然及びこの自然の中に生きるチベット民族、そして地球温暖化の影響を受けるチベット高原の今を紹介する。

<http://www.gesanmedo.or.jp/photo130308.html>

● **会期：2013年3月8日(金)～22日(金)**

10:30～17:30 *日・祝除く

● **会場：東京中国文化センター**

(日比谷線「神谷町」駅4番出口より徒歩約5分/銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩約7分/港区虎ノ門 3-5-1 37森ビル 1F/☎:03-6402-8168)

● **ギャラリートーク：3月12日、14:30～16:30**

◆ **主催：NPOチベット高原初等教育・建設基金会**

◆ **協賛：東京中国文化センター 他**

◆ **問合せ：☎03-5912-1232(主催団体)**

※烏里烏沙氏が、町田市在住の折、NPOチベット高原初等教育・建設基金会と「わんりい」共催で何回か氏の個展を開催しました。久しぶりに氏の個展を拝見する機会です。

町田国際交流センターの催し

講演会『**最近の中国事情**』

<http://www.machida-kokusai.jp/?p=1427>

～日中国交正常化から今日に至る日中関係～

講師：**莫邦富**

(在日中国人作家/ジャーナリスト
著書『新華僑』、『蛇頭』他多数)

尖閣問題が日中間の深刻な懸案となる中、「日中友好のために全力投球していきたい」と述べる同氏の話をお聞かせ。

● **開催日時：2013年3月24日(日)**

● **開催時間：14:00～16:00**

● **会場：町田市民フォーラム3階ホール**

東京都町田市原町田4-9-8、JR横浜線・小田急線町田駅徒歩7分

● **参加無料(定員188人、申し込み順)**

● **申込み方法**

FAX で、住所・氏名・参加人数と電話番号を町田国際交流センターへ(FAX 042-722-5330)

◆ **問合せ：町田国際交流センター ☎042-722-4260**
(8:30～17:15 日・祝除く)



【3月の定例会】

◆ **定例会：3月15日(金) 13:30～**

◆ **4月号のおたより発行日：4月1日(月) 13:30**

共に田井宅です